

<全体分析>

試験時間 2科目 120分

解答形式

マーク式・記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少)・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化)・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

試験時間に対し、問題量は多めである。

典型問題では見られない要素も入っており、その場での理解力・対応力が必要である。

その他トピックス

なし

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
[I]	マーク式 空所補充	波動 (光の反射・屈折と干渉)	物理	前半は薄膜の干渉の問題で、きちんと得点したい。後半はレンズとニュートンリングの問題だが、装置が複雑である。図を読み取り、光路を把握し幾何学的に考える必要があり、解きにくかっただろう。	やや難
[II]	記述式	力学 (万有引力・ケプラーの法則・単振動)	物理	万有引力とケプラーの法則を用いる典型的な問題であり、高得点をとりたい。ただし、惑星の中心から宇宙船までの距離が問ごとに様々なので、注意が必要。また、ここでのばね振り子の周期は、ばね定数とおもりの質量だけで決まることに留意しよう。	標準
[III]	記述式	電磁気 (コンデンサー・電気振動)	物理	全体的にはコンデンサーの典型的な問題であるが、金属板・誘電体を入れて電気容量の変化による極板上の電荷を問うもの、コイルもつないで電気振動を考える問など様々なことが問われている。難しくはないが問題設定が次々変わるので、条件の把握を的確に行う必要がある。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

標準的な入試問題集などに加えて、過去問などを通して見慣れない問題や複雑な問題にも対応できるようにしておこう。基本法則は原理に立ち帰って理解しておくことが必須である。

例年、試験時間に対して問題量が多い。やはり、迅速で正確な計算力を養っておくことが大切である。